

月のない夜だからこそ

宮崎県宮崎市 水上 夏貴

「まだ戸籍謄本^{とうほん}取ってないの？ これじゃパスポートの申請ができないじゃない」

もう何度も聞いた彩音の不満そうな言葉が、今夜も友哉に投げかけられた。

「うん。けど、海外に行くって言っても、まだ行き先もちゃんと決まってるから、それが決まってるからでも遅くはないと思うんだよ。パスポートを申請するのも、そのための戸籍謄本を取るのも」
言い訳のような友哉の言葉など、もうすっかり聞き飽きたというような表情の彩音。

「そりゃそうだけど、このままじゃいつまでもどこに行くかも決まらないままじゃない」

ここ数ヶ月ほど、二人のあいだで同じような会話が繰り返されてきた。友哉と彩音は結婚して五年ほど過ぎた。結婚式も挙げていないし、披露宴も開いていない。そして新婚旅行にも行っていない。ちょうどコロナ禍だったから、すべてを諦めざるを得なかった。

けれど、ここ半年ほどのあいだに、さすがにそろそろ旅行くらいは、それもせっかくだから海外旅行には行こうかと二人で話していた。結婚五年目を記念したのも大きい。

海外に行くならどこに行こうかと話し合い、二人がいつどれくらいなら休暇が取れそうか、そして予算との兼ね合いで、旅行の候補地をいくつか挙げた。この数ヶ月の話し合いで、けれど、パスポート申請のための戸籍謄本を取得する段になって、友哉の動きは途端に鈍くなった。

「そりゃ、事情は理解できなくはないけど……」

いつも彩音は最後にはそう言って、諦めのようなため息をつく。そんなふうに数ヶ月の時間を浪費した。申し訳ないなあと友哉は思うのだけれど、やっぱり重い腰を上げることができないまま。

二人のあいだにまだ子どもはいない。そういうこともあって、海外に行こうという話になったのもある。結婚費用も少しは残っているし、今のうちなら二人でゆつくりと旅行を楽しむことができる、と。

結婚してある程度の時間が経つのに子どもがいなかったことは、数年前にふたりで真剣に考えたことがある。そして実際に病院で診断してもらった。

けれど、夫婦二人とも特に異常はないと告げられた。同時に、心理的なものかもしれないとも言われた。そういうものなのかもしれないけれど、どこか釈然としないまま数年が過ぎた。

いまだに子どもができる気配はなかった。

ときどき友哉は考える。子どもが欲しくないわけではないし、子どもがいたらそれはそれで楽しく幸せな日々だろうと。

けれど同時に、自分の生い立ちを考えたとき、自分が本当に自分の子どもを幸せにできるのだろうかと不安に陥ることもある。

そんな不安を彩音に話したことはない。

彩音は自分たちの子どものことをどう思っているのだろう。聞いてみたい気もするけれど、なぜか躊躇^{ためら}われる。二人で病院に行き、二人とも異常はないと医師に告げられてから、子どもの話はどこかしら避けるべき話題のように感じられるからだ。

「ただいま」

「おかえり。友哉くんに手紙が来てた、速達で」

ある日、帰宅した友哉に彩音が一通の封筒を差し出した。速達を示す赤いスタンプが押してある。千葉県市原市役所の福祉事務所からの封筒だ。

市原市といえば友哉が生まれ育った町であり、戸籍の本籍地でもある。けど、戸籍謄本はまだ申請していないし、そもそも福祉事務所が差し出した手紙だから、パスポート申請とは何の関係もないだろう。

そう考えながら、着替えもそこそこに封筒を開く。そこには友哉の母親が危篤^{きとく}だから、すぐに下記の連絡先に連絡をしてほしいと書いてあった。そして、母親が入院しているという病院名も。

友哉は母親と四半世紀ほど会っていない。友哉は高校卒業するまでのほとんどの時間を市原市にある児童養護施設で育った。施設に入ったのは小学校に入る前のことだ。

そもそも生まれたときから母子家庭だった。母親の両親や兄弟姉妹にも会った記憶がない。母親はたったひとり友哉を産んで、

育てた。友哉が施設に入るまで。

そんな友哉には父親もない。もちろん、生物学上の父親はいらるのだろうけれど、どんな名前でもどんな顔をしてどこにいてどんなふうに生きているのか、まったく知らないまま育った。たった二人だけの家族だったと言っている。

友哉を児童養護施設に預けたはじめの頃、母親はときどき施設に会いに来てくれたこともあった。それだけじゃなく、友哉を連れて外泊して一緒に過ごすこともあった。

それまで二人で住んでいた部屋ではなく、一段と狭くて暗いアパートの部屋だったけれど、施設とは違って楽しく幸せで満ち足りた時間を過ごせたことを覚えている。

けれど、そのような母親との再会の時間が一陣の風のように過ぎ去ってしまったえば、別れる時間がやって来た。幼い友哉は母親と別れるとき、必ず「二度とお母さんと離れたくない」と言っていて泣いた。全身から涙と泣き声が爆発するように。

「ごめんなさい。お母さんだってそれができれば良いって思う。けど、しかたないの。本当にごめんなさい、友哉」

いつも決まって母親はそう告げた。ひどく悲しそうな表情を浮かべ、苦しそうに。友哉を強く抱きしめながら。

しかし、やがて母親が友哉に会いに来る頻度はだんだんと少なくなっていく。友哉が小学校に入学し、そして学年をひとつかふたつばかり上がった頃、ついに母親は友哉に会いに来なくなつた。

結局自分は母親に捨てられた。

年齢を重ねるにつれ、友哉の胸にはそんな思いが膨らんでいった。今もそんな思いが胸のつかえのように存在している。今になって思えば、それは母親を恋しく思う気持ちの裏返しなのかもしれない。

けれど、結局のところ事実としては、友哉は小学校の低学年以来、母親には会っていないのだった。

友哉はそのまま高校卒業まで児童養護施設で育った。高校を卒業すると、施設から出ていかなければいけない。友哉は奨学金を受けながら、横浜市にある医療技術系の専門学校に進学することになった。医療系の資格を取ってひとり立ちするために。

そうして大人になった友哉はいま、放射線技師となつて働いている。放射線技師を目指したのは通っていた高校の教師が勧めてくれたからだ。君は数学や物理も得意だろう。これなら国家資格だし、食いつばぐれはないぞ、と。

医療系の専門学校など東京湾の向こう側に求めなくても、千葉県内や東京都内にもたくさんあるにもかかわらず、東京湾の対岸にある横浜市内の学校に進学先を選んだのは、市原からできるだけ遠くに行きたかったこともある。

とにかくそうして市原を出てからは、生まれ育った故郷の町に一度も戻ることはなかった。正しくいうのなら、「戻ることができなかった」というべきかもしれない。

やっぱり自分は母親に捨てられたのだという思いがあったから。

「そういう事情なら、明日の朝いちばんに病院に行つたほうがいいよ。絶対すぐに飛んで行かなきゃ」

手紙の内容を友哉から聞いた彩音は強い口調で言った。

「急にそんなこと言われても。明日は朝から検査の予約がずっと入ってるんだよ。誰かに代わってもらえないかって？　さすがにこんな急じゃ無理だよ。明日は仕事に行くしかない」

「お母さんが危篤なんだよ。そんなこと言ってる場合？」

「そうだけども、今さら急にそんなこと言われても。正直なところ、困ってるんだ」

「困ってる？」

「だって、子どもの頃からずっと会っていないのは彩音も知ってるだろう？　連絡さえ来なかった。ずっとずっと二十五年近くも。なのに今さら……」

そんな友哉にすかさず彩音が言葉を放つ。

「子どもの頃のつらい思い出があるのはわかるし、複雑な気持ちがあるのもわからなくはない。

けど、向こうから連絡が来たつてことは、お母さんはやっぱり友哉くんに会いたがつてるんだよ。きつと、何か事情があつたと思うよ。友哉くんにずっと連絡できなかった理由がね。

それに市役所からの手紙には危篤つてあるんでしょ？　つてことは、こんなことあまり言いたくはないけど、時間がなくてこつとだと思つ。速達で送られてきたんだし。できるだけ早く会いに行つたほうがいいよ」

彩音は最後には怒り口調となつた。友哉は無言になつてしまふ。

彩音の言うことはまったく正しいし、彩音の言ったとおりにした方が良いことはわかる。

けれど、突然の手紙に心が乱れている。大きな嵐に巻き込まれたように。心の中で強烈な風が吹き荒れ、大きな雨粒が弾丸のように降り注いでいる。友哉はそんな嵐に翻弄^{ほんろう}されるほかなかった。

そんな友哉に向かって彩音が念を押すように言う。

「絶対にできるだけ早く行ったほうがいい」

「……」

やっぱり無言のままの友哉に、彩音は怒った口調で告げる。

「私が友哉くんの首に縄をつけてでも連れて行くから」

「……、わかったよ。でも、彩音だって休みを申請しなきゃいけないだろ？ 明日、急に休むってわけにもいかないだろう？」

「まあ、そうだね」

彩音は介護老人保健施設で働く理学療法士だ。友哉の働く病院の系列の施設。そこにしだって人手不足で忙しい。だからこそ、明日の朝に電話で「今日休ませてください」といきなり申し出るわけにもいかないだろう。

大人になると思いつてすぐに行動に移すなんてこともできないのかもしれない。

市原市内にある八幡宿駅^{やわたじゅく}に友哉と彩音が降り立ったのは、速達の届いた翌々日だった。青々とした空が広い。駅前のロータリーを取り囲むように四、五階建てのマンションやビルがいくつか建ち、向こうへと伸びる道路と大きめのスーパが並ぶ。典型的な

郊外の地方都市という風景。けど、空気は良く、思わず深呼吸してしまふ。

「のんびりとしていいところじゃない。ねえ、懐かしい？」

「実は初めて来るんだ、この駅は。僕はいつも、もうひとつ行つた先の五井駅を使つたから、ここは通り過ぎるだけ」

「でも、ずいぶんとひさしぶりの故郷には変わらないでしょ？」

「そうだけど、馴染みのない風景だからね。このあたりは。特に感慨というものはないよ」

正直な気持ちだった。五井駅で降り立ったなら、もう少し懐かしさを感じたかもしれない。でも、今はそんなことを言ってる場合ではない。二人はバスに乗り継ぎ、母親の入院する病院にたどり着く。

「けっこう大きな病院ね」

バスを降りた彩音が病院のてっぺんを見上げながら言った。

「うん。思っていたよりも」

タクシーが何台か待機し、車が駐車場を埋めていた。エントランスの自動ドアがときどき開いては閉まり、人々が出入りする。二人もエントランスに足を踏み入れる。

「どうしたの？」

フロアの方に行く彩音が振り返る。友哉の足が止まっていた。それ以上、先へと進むことを拒むように。そのまま友哉はふらふらと、いちばん近くに置いてあるソファに吸い込まれるように座り込む。

「ごめん。ここで少しばかり気持ちを整理させてほしい」

友哉は暗い顔をして彩音にそう告げる。彩音は友哉の手を強く引く。友哉をもう一度、立ち上がらせようと。しかし、友哉は立ち上がれない。その身体は重くソファに沈んでいた。錘おもりのよう

に。そんな友哉の胸にさまざまな感情の波が押し寄せていた。真冬の海のように冷たく暗い波だ。

今さら母親に会うのに、どんな顔をすればいいのか、どんな言葉をかければいいのか。そういつた感情への答えが出せないまま。

彩音は困った顔をしながらも友哉の隣に腰を下ろす。

「ごめん。ここまで来ておきながら」

友哉の言葉に彩音が首を振る。

「いいよ、しょうがないよ」

二人はしばらく無言のまま時間をやり過ぐすしかなかった。

「ねえ、何か飲む？ お茶とか水とか」

唐突に彩音が言った。

「うん、頼むよ。悪いけど」

そう告げると、彩音はひとりで病院の奥へと歩いていった。彩音がなくなってしまうと、友哉はふと孤独を感じた。落ち着かなさを抱えながら、エントランスのあちこちに視線を向け、そして背後を振り返る。

背後の窓からは眼下に広がる街並みの向こうに少しだけ海が見えた。この病院は平野のふちを取り囲む小高い山の中腹に建つ。バスがのんびりと坂道を登ってきた。もっと上の階に行けば、海や市街地を見渡すことができるかもしれない。

「海か……」

海といえ、友哉が施設に預けられる前夜、友哉は母親に海へと連れられて行った記憶がある。真つ暗な夜の海だ。

それはどこかの岸壁みたいなところで、海と陸とを分ける柵の向こう側でくろぐろとした波がうごめいていた。幼い友哉はそれが巨大で不気味な生物のようにも思えた。ひと飲みにされるか、ひと思いに潰されるか。

そんな海の向こう側の少し遠くで、工場群の夜景が輝いていた。まばゆい光を放つ巨大な工場たち。夜空に伸びた煙突からは煙を吐き出していた。工場群の明かりに照らされ、真つ白なもの、淡い緑色のもの、オレンジ色のものと、さまざまに色づいた煙が夜空に立ち昇る。地球の吐き出した息のように。

そのとき、工場群を眺めていた母親がつぶやいた。

「今夜は月のない夜だから、よけいに夜景がきれいに見えるのね」それから母は号泣しはじめた。友哉を強く抱きしめながら。それだけの記憶だけれど、やけに強く記憶に残っている。

大人になって考えてみると、そのときの母は自分と心中しようとしていたのかもしれない。そんな暗い確信が付きまとった。友哉を手放す事態になってしまったことに呵責かしかくを覚えて。そんな確信を払いのけることはどうしてもできなかった。

それとも。

友哉はこの記憶を思い出すとき、いつも考える。それともそのとき、母と心中していたらどんなに良かったら

うと。けれど、今さらそんなことを言ってもしかたない。結果として心中なんてできなかったし、母と友哉は生き延びたのだから。

「友哉くん」

エントランスのソファに深く座ったままの友哉のところに、彩音が戻ってきた。彩音だけでなく、他に三人の人物が一緒だった。二人は福祉事務所の職員で、もう一人は看護師。友哉はあいさつのために思わずソファから立ち上がるしかなかった。

病室のベッドで母親は静かに眠っていた。

「お母さん」

友哉は母親の手を握り、声をかける。けれど、反応はない。肉の削げ落ちた枯れ木のような手と指。ほのかな温かみはあるが、かすかな反応もないものは感じられなかった。友哉の覚えている母親と手のひらと、まったく変わってしまった手。

「ここ数日、ずっとこんなふうに眠っています」

看護師長だと自己紹介した看護師がそう説明した。それから、母親と友哉と彩音だけを病室に残して、他の三人は出て行った。

友哉は母親の手を握ったまま、眠る顔を眺める。その顔には会わなかった四半世紀ぶんの時間の重みがしつかりと積み重ねられていた。友哉の記憶の中の顔とは何もかも違っていった。

けれど、確実に自分の母親だ。目も鼻も口も耳もすべては、記憶の中にある母親の顔と一致している。四半世紀という時間の中でその顔は大きく変わり、そして何も変わってはいなかった。

だからこそ、時間の積み重なりが余計に戸惑いを生み、それ以

上何を言えいいのかわからなくさせてしまう。

友哉が無言のまましていると、彩音が母親に語りかけはじめた。

「はじめまして。私は友哉くんの妻の彩音と言います。こんなことになるまでお母さんにお会いできなくて本当に残念です。本当はもっと早くお会いできればよかったんですけど」

やっぱり母親からは何の反応も示さない。それでも彩音はひと息入れたあと、ふたたび言葉を続ける。

「とにかく、私は五年ほど前に友哉くんと結婚して幸せに暮らしています。子どもは今のところいないんですが、こればかりは自然に任せるしかなさそうですね。」

でも、子どもがいてもいなくても、私は友哉くんとこれからもずっと幸せに暮らしていきたいと思っています。だから、お母さんも安心してください」

そんな彩音の呼びかけを隣で聞きながら、友哉は舌を巻く。

これじゃ一生、彩音に頭が上がりえないな。

こんな状況ながら、そんなことをまず思った。こんな状況だからなのかもしれない。どちらにしても、こんな状況でそんなことを言われたら彩音を一生幸せにするしかない。するしかないだろう。

考えてみれば、彩音と結婚するときに母親を探そうかどうか、二人で話し合ったことがある。けれど、そうしているあいだにコロナ禍となり、結婚式や披露宴どころではなくなった。母親の話もそれっきりになったのだった。

そのときに、本腰を入れて母親の居場所を探していれば。

けれど、今さらそんなことを後悔しても何の意味もなかった。友哉は彩音と母親の手を取り、そして母親に語りかける。話しておくべきことを今のうちに聞かせておかなければという義務感のような、責任感のようなものに突き動かされて。

「お母さん……」

高校卒業までこの町の施設で暮らし、それから専門学校に入学するのと同時にこの町を去った。やがて放射線技師となり、今は横浜市内の病院で働いている。彩音と結婚してつましいながらも楽しく幸せに暮らしている。

「それから……」

そんな報告を語りかけているうちに、もつと胸の奥にあるものが次々にあふれてきた。今こそ伝えておかなければ、ぜったいにあとで後悔するだろうという感情もすべて。

子どもの頃からずっと母親が迎えに来てくれるのを待っていたけれど、いつの間にかその期待も失ってしまったこと。そのせいで母親に捨てられたと思っていたこと。いつか、自分に会いに来なくなった本当の理由を聞こうと思っていたこと。

今になってやっと会えたのに、言葉を交わせなくなっていることが悲しく、くやしいこと。そういったことをずっと語った。

友哉がすべて語り終わるまで、母親はずっと深い眠りの中이었다。

その夜、友哉の母親は息を引き取った。静かに眠ったまま。それは生から死へとその境界さえ曖昧なままほどの死だった。

「このたびはお悔やみを申し上げます」

母親が別室で死後の処置を受けているあいだ、病室に福祉事務所の職員がやってきた。

まず男性の方が自己紹介した。

「わたくしは保護第二係長の永田と言います」

「菊池と申します」

永田は四十半ばくらいの実直そうな男性で、菊池という職員は三十を少し過ぎたくらいの、表情をあまり変えない女性。

「母が入院して以来、とてもお世話になったようで。看護師長さんに聞きました。入院手続きから生活保護の手続きまで、すべてやっていただいたみたいで。本当になんとお礼を申し上げますはいか」

友哉が頭を下げる。永田は手で制しながら言った。

「いえ別にお礼には及びません。仕事ですの」

それから永田と菊池は二人でこれまでの経緯を友哉と彩音に説明してくれた。母親自身が語ったことと、永田と菊池が調べたことを。

母親は友哉を施設に預けてからも、幼い息子を引き取ろうと必死で働いていた。なんとかひとり立ちしようと。そのために何か資格の勉強をすることも、かなり現実的に考えたようだ。

けれど、生活と仕事に追われる中で資格取得のための勉強時間を確保するのも難しく、なにより学校に通ったり、テキストや問題集を購入したりする費用を賄えるような金銭的余裕もなかった

という。

そんな母親が若い頃には、再婚を考える相手もいたらしい。けれど、ネックになったのは友哉の存在だった。シングルマザーとして出産し、認知されているとはいえ、婚外子の存在が、相手とのあいだに立ちはだかった。

「こういうことを息子さんに話すのは、わたくしどもとしても心苦しいのですが。でも、お母さまもお亡くなりになった今、やっぱりこのことはちゃんと息子さんに話しておかなければと思いついて」

静かな声でそう言った永田に、友哉は大きくうなずいた。

母親が再婚を考えていた相手は、子どもがいてもかまわないと言っていたらしい。けれど、周囲の人々がそれを快くは思わなかった。つまりは親や兄弟、それに職場の上司や同僚たち。周囲のノイズが日に日に大きくなっていった。なにしろ、三十年近くも昔の話だ。

そんなノイズの中で、再婚を考えていた相手との関係もいつしか立ち消えとなり、結局母親はたったひとりで必死に生きていくしかなかった。息子を引き取る余裕もないままに。

そして時が流れた。四半世紀以上もひとりで働き続け、生き続けた母親は、あるとき身体に耐え難い異変を感じた。以前から少しの異変を感じてはいたが、なかなか病院に行きあぐねていたらしい。

それでも、さすがに痛みなどに耐えかねて、近所の病院へ行ったところ、すぐに大きな病院に行つて精密検査を受けるように告

げられたという。

この病院での検査の結果、治療の困難な内臓を侵される病気だと判明した。蓄えもほとんどないまま、仕事もできなくなった。そこで病院が福祉事務所に相談し、入院した母親は生活保護を受けながら治療を施されることとなった。

「そこで、私たちがお母さまの担当となったというわけです」

菊池という職員が、表情を変えずにそう説明した。

「そうですか。それはなんというか、ご迷惑をおかけしまして」

友哉の言葉に菊池は大きく首を振る。

「いいえ。それが私たちの仕事ですし」

「でも、母は私のことは何も言わなかったんでしょうか？ 入院するときに」

友哉がそうたずねると、菊池がさらに説明を続けた。

はじめのうち、母親は息子の存在を誰にも語らなかつたらしい。ただ、生活保護の手続き以上、母親の血縁者などを菊池が調査した。

友哉という息子が存在していることはそれで把握したし、ひと昔だったなら親族に支援などの照会を行うところだったが、今はそこまでやらないことになっている。菊池はそう説明した。

入院した母親は、手術をしても治療は困難だと判明した。長いこと病院に来ていなかったせいで、治癒する見込みはほとんどなかった。医師がそのことを母親に語った。日に日に母親の病状は進行していった。筋力も体力も衰え、ひとりで歩くことが困難となり、ベッドで寝て過ごす日々が増えていった。

そんなふうに病状が進行するなかで、心境にも変化が訪れたのだろう。やがて母親は友哉の存在を語りはじめた。友哉をこの世に生んだときからの自らの歩みを永田や菊池に、そして病院の看護師に。

そんな母親はじめ、友哉に連絡することを拒んだという。ずっと会いに行けなかった息子に今さらどんな顔をして会えばいいのか、今さら息子に迷惑をかけたくない、と。

それでもさらに病状が進行し、ベッドに寝たきりになると、母親は友哉に会いたいという願いを口にするようになった。そうするうちに、ほどなくして意識も混濁していった。

「それで私が把握していた息子さんの所在地に手紙を出したんです。お母さまの意識がまだはつきりしているうちに、そういう話をして許可も取りましたので。事態が事態だけに」

そう説明する菊池に、友哉は大きくうなずいて告げる。

「そうですか。それはたいへんお世話になりました。手紙を出していたら、こちらとしても良かったです。なんとか最期に間に合いましたから……」

「いいえ。私どもとしてももう少し早く息子さんに連絡してれば、お母さまと少しでも話ができたかもしれないと、申し訳なく思っていたところです」

永田が軽く頭を下げた。

「できるだけのことをしていただいたので、感謝しかないですよ」
そばで話を聞いていた彩音が言った。けれど、永田は首を振る。
「いや、お二人には申し訳ないばかりです。お詫びのしるしと

言っではなんです、今からここで菊池と今回の仕事の話をします」

「はあ」

永田が言わんとするところがわからなかった。

「息子さんたちは、たまたまその会話が耳に入ったということにしておいてください。なにしろ、ここから先の話は今回の件と直接の関係のない話なので」

そうして永田は菊池を相手に話しはじめる。友哉と彩音など、この病室にいないというように。

「菊池くん、息子さんの父親についても調べたんでしょう？ 生活

保護申請の親族調査のときに」

「はい。亡くなった申請者の息子さんを認知していますから、万が一にも申請者が亡くなった場合、相続関係も調べておかないといけませんので」

菊池は永田にこたえる。職場での報告のように。

「お母さんの出産時に息子さんを認知した父親の戸籍の情報も記載されますから、それをたどりました。お父さんの戸籍も市内なので簡単に見つかりました」

友哉も初めて耳にする話だった。菊池はさらに報告を続ける。

「けれど、その父親は息子さんが五歳の頃に死亡していました」

死亡？ 友哉の手がふいに震えた。全身も一瞬だけ細かく震える。

「ここからは戸籍以外の情報なんです、お父さんが交通事故で死亡したのは、お母さんが息子さんを児童養護施設に入れる数ヶ

月前の話なんです。

お父さんはお母さんと正式に婚姻できなかったものの、息子さんが生まれてからはささやかながら金銭的支援をしていたようです。

けど、突然の事故でお父さんは亡くなってしまって、その支援も途絶えることになりました。それで生活に余裕のなくなってしまうとお母さんが市役所に相談し、息子さんを児童養護施設に預けることになったらしいです」

すべて友哉が初めて聞く話だった。そもそも、母親から父親についての話など、いっさい聞いたことがない。どうして母親は父親の話を自分にしなかったのだろう。そこまではわからない。

きつと永遠に誰も知ることのない場所にしまいこまれたまま、すべてを知る者の死という地層にゆっくりと埋まっていくのだろう。

「このあたりは書類の保存年限を超えていたので、公文書などは残っていませんでした。けれど、当時を知る元市役所職員を訪ね歩いて、それから児童養護施設にそのとき勤務していた職員も探し当てて話をうかがいました。断片的な情報しかありませんけど」

「それにしてもよくやったよ、聞き取り調査までしてもらって。じゃあ、私たちはそろそろ帰ろうか。あまり長時間勤務になると、うちの課長やら人事課がうるさいし」

永田と菊池は病室を出ていこうとする。友哉と彩音がここにいらないかのように。

「本当にありがとうございました」

友哉と彩音は病室を出た二人にお礼を述べる。永田と菊池は軽く会釈だけして、病院の廊下を向こうへと歩いて行った。

病院は市街地の外れの少し小高い場所にある。友哉と彩音は窓から外を眺めていた。夜の闇が満ちた世界の底に、市原の市街地や工場群の放つ輝きが広がる。小高い丘から眼下に広がる風景を眺めるときのように。

そこは友哉が生まれ、十八歳まで育った町。母親に捨てられ、二度と足を踏み入れることはないと思っていた町。そして両親が生き、死んだ町。

「ひょっとして今夜は月が出ていないのかな？」

ふと、そんな疑問を口にした友哉。

「どうして？」

隣の彩音が聞き返す。

「なんとなく気になって」

彩音はスマホを取り出し、調べはじめる。

「うん。新月の夜ね、今夜は」

彩音の言葉を耳にした瞬間、友哉の頭に母親の言葉が響いた。

「月のない夜だからこそ、夜景がことさら美しく見える」

街は街が美しく輝いていた。月のない夜だから。

特に工場群はひとときわ輝いている。ひとつひとつが巨大な生命体で、たくましく力をみなぎらせるように。それでいて白銀やオレンジ色の光が生命そのものに宿る体温のように、青白い輝きは繊細に宿る目の光のように、赤や黄色の警告色を心臓の拍動のように。

そういった工場群へと広がる市街地も、ひとつの銀河のように

輝きを広げている。あるいはどこか未知の世界へと飛び立とうとする鳥の羽ばたきみたいに。

窓の向こうのそんな夜景を眺めながら、友哉はふと考える。

あの夜。心中を考えていたお母さんは、こんなにきれいな夜景に囲まれて、死ぬのを思いとどまったのかもしれない。

そして母親はその生を全うできた。寂しく孤独な生ながら。

母親の葬儀が終わって一ヶ月ほどが過ぎた。

「バスポート申請してきた」

帰宅するなり友哉がそう告げると、彩音は意外そうな顔をした。

「お母さんのおかげというべきか、今回のことでもなにもかもみんなはつきりしたからね。今さら戸籍謄本を取ることくらい、別になんでもないよ。四十九日を過ぎたら本格的に考えよう、どこに行くか」

「そう」

彩音は嬉しそうに微笑んだ。

「実は私も言っておかなきゃいけないことがあって……」

「言っておかなきゃいけないこと？」

バスルームに入ろうとしていた友哉は彩音に振り返る。

「うん。実は赤ちゃんができたの」

「!?」

友哉は何も言えない。混乱と戸惑いのなかで、彩音の言葉を何か聞き間違ひでもしなかったかとさえ疑う。

「赤ちゃんができたってことは、妊娠？」

「当たり前じゃない」

結婚して五年あまり、あんなにできなかった赤ちゃんが、いま彩音のお腹の中に宿っている。なんだか不思議な感覚だ。

「せっかくバスポート申請に行ってくれたのに、しばらくは海外旅行どころじゃないね」

複雑な表情を交えながら彩音が言った。そんな彩音に友哉ははつきりと告げる。

「いやあ、こればかりは赤ちゃん優先だよ。旅行なんて子どもが大きくなってから行けばいいよ。人数が多い方がにぎやかで楽しい旅行になるだろうしさ」

そんな友哉の言葉に彩音が大きくうなずいた。

(おわり)